

エキスティックス理論と千年村方法論の間における地域評価手法への考察 ——中国雲南省大理白族自治州諾鄧村を事例に——

2019/02/01
中谷礼仁研究室 5217A054-1 蔣一悠

第一章 序論

- 1.1 研究背景
- 1.2 研究目的
- 1.3 既往研究
- 1.4 研究方法

第二章 諾鄧村

- 2.1 対象
- 2.2 エキスティックス理論の応用
- 2.3 千年村チェックリストの応用

第三章 両理論の往来

- 3.1 両理論の類比
 - 3.1.1 エレメントの類比
 - 3.1.2 分野原則の類比
 - 3.1.3 プロット性格の類比
- 3.2 エキスティックス批判
 - 3.2.1 社会背景
 - 3.2.2 方法論構築のプロセス
 - 3.2.3 思想背景
 - 3.2.4 小結
- 3.3 千年村批判
 - 3.3.1 社会背景
 - 3.3.2 方法論構築のプロセス
 - 3.3.3 思想背景
- 3.4 チェックリストのあゆみ
 - 3.4.1 「三位一体」から「交通」の発明
 - 3.4.2 千年村の記述モデル題からチェックリストへ
- 3.5 手の理論と足の理論
 - 3.5.1 創造と発見
 - 3.5.2 スケール
 - 3.5.3 外力と内力、人間の需要と人間の工夫

第四章 評価手法への試論

- 4.1 歴史的変容への認識
 - 4.1.1 持続的変容プロセス概念モデル題
 - 4.1.2 外力と変化の問題
- 4.2 結晶構造の動的平衡モデル——運動体としての千年村
 - 4.2.1 はじめに
 - 4.2.2 人間という第五の要素
 - 4.2.3 人間内力による水素結合
 - 4.2.4 力の交換空間として交通
 - 4.2.5 歴史的変容という名の相変化
 - 4.2.6 時のかたち——「結晶構造の動的平衡モデル」
- 4.3 諾鄧における動的平衡
- 4.4 記述と処方への往来

第五章 結論と展望

- 5.1 結論
 - 5.1.1 両理論の異同
 - 5.1.2 評価手法の試論
- 5.2 展望

付録

- 6.1 ドクシアディスとその仕事
 - 6.1.1 ドクシアディス経歴
 - 6.1.2 ドクシアディス著作リスト
 - 6.1.3 エキスティックス誌・ドクシアディスの記事一覧
- 6.2 エキスティックス理論——Ekistics Grid
- 6.3 理論の進化——Anthropocosmos Model

第一章 序論

■研究の目的

- ①エキスティックス理論を整理し、
- ②両理論を諾鄧村という事例を通して両理論を省察し、
- ③地域評価手法への一考察を加えることである。

■エキスティックス理論

自然・人間・社会・シェル・ネットワークの5つの要素、経済・社会・政治・技術・文化芸術の5つの学問原理、15の対数関係のユニットなど、様々な分類を組み合わせた二次元グリッド上で、対象を分析評価する手法である。

■千年村チェックリスト

環境、地域経営、交通、聚落構造の4つ視点に分類された一問一答によって地域を評価するものである。

第二章 諾鄧村

諾鄧村は、中国辺境の山地集落という特殊な政治性や自然環境、製塩という二次産業を生業に二千年以上持続してきた集落である。両理論と異なるコンテキストの持つ諾鄧村は第三者による検証として適切であると考えられる。

■諾鄧村 x エキスティックス理論

諾鄧産業の今昔を4つのエキスティックス・グリッドを用いて記述し、諾鄧における関係性の広がりや製塩の最盛期と比べて縮小しており、また、外力の観点から諾鄧の歴史の変容を分析し、自然、政治、交通に外力の重心があることが分かった。

■諾鄧村 x 千年村チェックリスト

また、チェックリストによる検証の結果、現在の諾鄧村は、地形を読み込んだ聚落配置や人間の工夫に満ちた民家形式があること、聚落の歴史を語る塩井、道、建造物および塩と少数民族の文化・伝統が残っていることから、現在の諾鄧は千年村認証基準のIV(聚落構造)に特に秀でたと評価した。

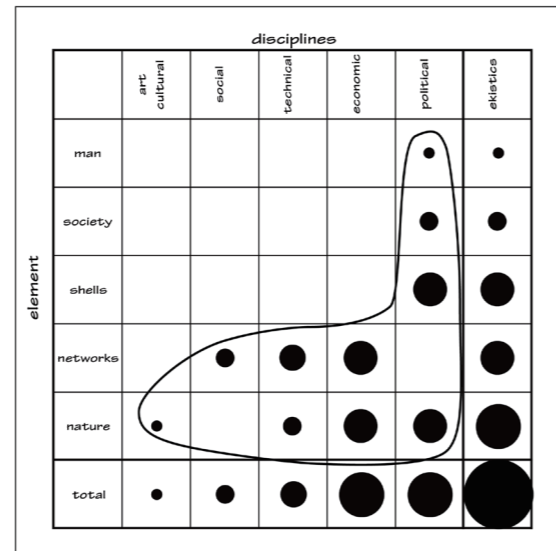
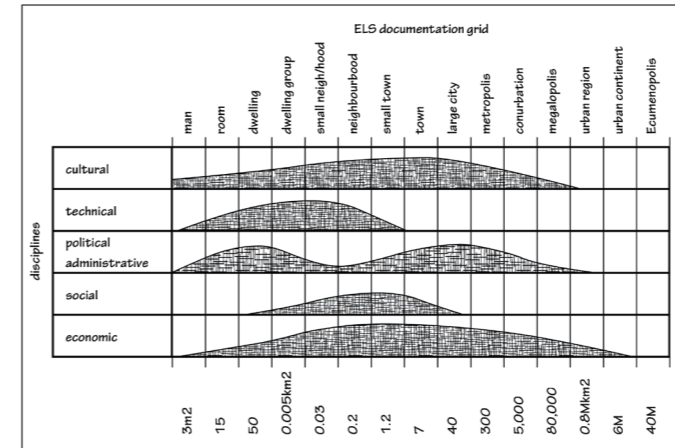
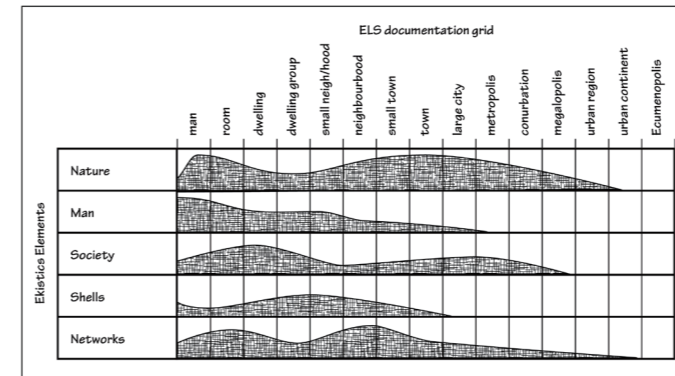


図1 外力の観点——要素と原理の二次元グリッド

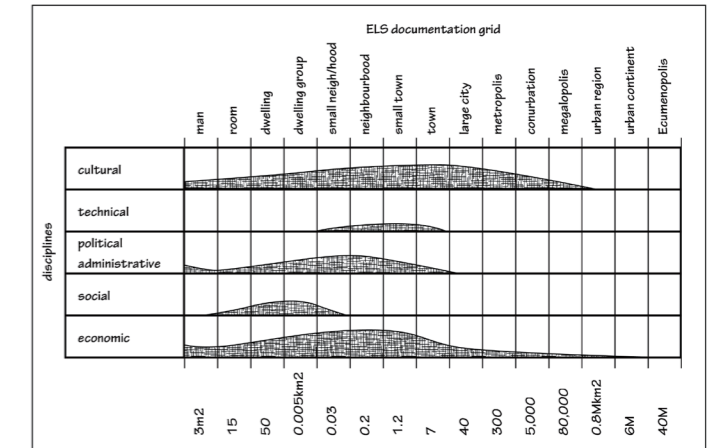
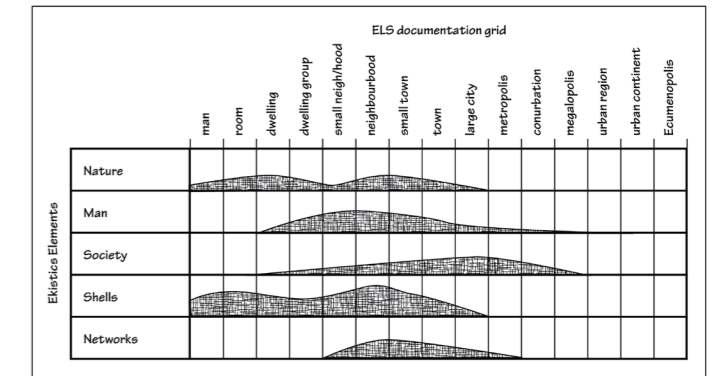
(上) 図2 ユニットと要素の二次元グリッド——産業(過去・製塩)

(下) 図3 ユニットと原理の二次元グリッド——産業(過去・製塩)



(上) 図4 ユニットと要素の二次元グリッド——産業(現在・観光と農業)

(下) 図5 ユニットと原理の二次元グリッド——産業(現在・観光と農業)



第三章 両理論の往来

エキスティックスの5要素と千年村の4つの視点の類比より、エキスティックスの人間要素は人間需要の変化に関心を寄せているのに対し、千年村では人間の工夫という隠れた視点を持っている。また、エキスティックス理論では領域の二次元スケールに非常にこだわっているものの、高さが捨象されました。対して、千年村は地形や微高地などの高さスケールと聚落の関係を見いだすことに成功している。

一方、両理論をそれぞれ誕生の社会背景、方法論構築プロセス、思想背景での分析も行いました。エキスティックスはドクシアディス家の政治背景や古代ギリシャ思想、近代ギリシャ諸問題を背景に、創造へ向けたベクトルとして、外力による人間需要の変化を念頭に、要素間の関係性をマトリクス上で徹底的に分析する手の理論である。対して千年村チェックリストは持続要因の発見へ向けたベクトルから出発し、一部マルクスの交通概念を参考に、フィールドワークを重ねることによって見いだした優れた生存立地と人間の工夫に焦点を当てている足の理論である。

特にチェックリストについて、神保地区「上下村」の発見によって交通要素が発明されたこと、2012年の「千年村の記述モデル題」から現在まで刷新してきたチェックリストのあゆみを整理した。

(上) 図6 両理論誕生背景の類比——手の理論と足の理論

(中) 図7 両理論内容の類比——外力と内力

(下) 図8 両理論実態の類比——研究と計画の陰陽

■両理論の固有性		
	エキスティックス理論	千年村方法論
社会背景	20世紀中頃都市の人口爆発 近代ギリシャの諸問題 ユートピア思想の偏り	東日本大震災 地震大国としての危機感 壊れた村の調査
ベクトル	創造(無のづくり)	発見(有のさがし)
思想背景	古代ギリシャ、アリストテレス 政治キャリア、貧困者への配慮	マルクスの交通——交換 歴史キャリア、持続的変容への関心
構築プロセス	理論と計画との相互フィードバック	フィールドワークから理論へ 試行錯誤で理論の更新
	手の理論	足の理論

■両理論の類比

	エキスティックス理論	千年村方法論
主な対象	都市	集落
人間について	人間の需要	人間の工夫
交通について	ネットワーク——他者との関係性	交通——物質的精神的交換
広がり	一人の人間~地球	基本的に大字
高さ	ほぼ配慮せず	山地・台地・扇状地・低地+微高地
プロット	抽象的全体における位置づけ	正確な地図上の位置プロット
普遍性	普遍的方法論	
	外力の観点	内力の観点

■両理論の実態

	エキスティックス理論	千年村方法論
主体	学習を前提とした研究者、学生	一般人、研究者
使い勝手	アイデア次第の使い方	一問一答
機能	研究・分析のためのフレームワーク	評価のための基準
理論と実践の往来	デロス会議 ACEとDA	千年村関東会議 千年村PJと千年村計画

第四章 評価手法への試論

4.1.1 持続的変容プロセス概念モデル題

持続とは変わらないことではなく、n1の内実を変えながら三位一体セットがなおバランスとして保たれる(n2)ことである。その意味で千年村の評価は、土地固有システム(キャラクター)とそこに発生した内実の持続的変容プロセスとの2つの観点から読み解いていく必要がある。

「2014年度 利根川流域疾走調査報告書」2015.02.28 発行、p.129

4.1.2 外力と変化の問題

	チェックリストver.2.3の項目	内力	交通	外力	過去	現在	変化
1. 自然	①集落のかたち、立地、古いところ	○			●	○	
	②生産地の立地	○			●	○	
	③主要産業・特産物				●	●	
	④水源と水の引き方	○			○		
	⑤近年の土地開発について		●	●	○	●	
	⑥過去の災害とその対策	○			●		
2. 地域経営	①各種組織	○					
	②地域内での情報伝達、連絡の方法		●				
	③山林、里山また湖などの管理主体	○					
	④水の管理主体	○					
	⑤地域祭礼・年中行事	○			○	○	
	⑥地域の歴史・物語の伝承	○			○	○	
	⑦口伝・通称の地名				○	○	
3. 交通	①昔からの道		●	○	●		
	②現在の主要な道路		●			○	
	③建設予定の道路の有無		●	●		●	
	④水運の有無と利用法		●		●	●	
	⑤鉄道の有無、その経緯と現状		●	○	○	○	●
4. 集落構造	①集落の核				●		
	②墓地の場所と現状	○				○	
	③集落の維持について	●				○	
	④文化・自然遺産の有無				●		
	⑤集落の型		●				
	⑥暮らしの工夫、村での発明	●			○	○	
	計	6.5	8	4	12	6.5	3

●：主要視点=1 ○：補助視点=0.5

図9 チェックリストのベクトル分析の一例

千年村利根川疾走報告書で提案された「持続的変容プロセス概念モデル題」の考えを参考しつつ、内力・交通・外力と過去・変容という5つのファクターを提起し、チェックリストの歴代バージョンを分析した。結果、第五の要素である人間という内力に常に高い関心を示しており、また外力や変容への関心もバージョンアップにつれ上昇していることが分かった。

グラフから見て取れるように、隠れた第五の要素である人間という内力、チェックリストは非常に高い関心を示しており、また、外力や変容の要素もバージョンアップにつれ傾向が上昇していることが分かる。したがって、千年村チェックリストによる地域評価手法には、内力・外力・変容という3つのベクトルが埋め込まれており、また、交通の概念は、物理的交通のみならず、「交換」、「交流」を含んだ広義な概念であった。

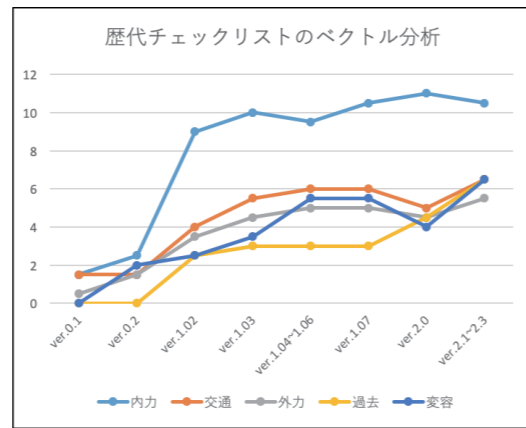
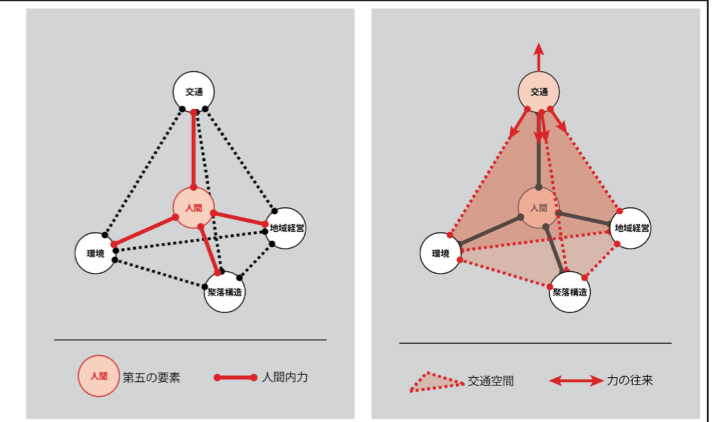


図9 外力の観点——要素と原理の二次元グリッド

結晶構造の動的平衡モデル

結晶構造の動的平衡モデルとは、環境、地域経営、集落構造、交通という4つの頂点と人間という重心をもち、氷の結晶構造にならった正四面体モデルである。重心と頂点を結ぶ水素結合、つまり人間の働きによって様々な外力を受けつつも依然として「氷」として保つ「動的平衡」の観点によって、聚落における持続的変容プロセスの評価を試みる。その場合、上部の交通は内外の力学的交換が行われた空間であり、「動的平衡」を保とうと絶え間なくその形を調整している。



4.3 諾鄧における動的平衡

古く二千年前から鹵水が取れる諾鄧は、塩目当の移住者より聚落が発展し、茶馬古道での塩貿易によって繁盛し、最盛期では大理府租税の80%以上が雲龍県の塩税によるものであったほどだった。1950年代から1995年まで行われた集団製塩によって環境が破壊され、土砂崩れが起り、聚落構造が大きく変化していた。近代交通の出現により、人力と馬による諾鄧の道は、東南アジアと結ぶ交通ルートの要所としての優位性が失われ、製塩が廃止された諾鄧は閉鎖的な山地聚落と逆戻り。近年は政府による観光の推進が行われ、それに応じて自発的な村民による家庭博物館や民宿経営目的の移住者が見られた。

つまり、製塩目的の第一次人口移動、茶馬古道で形成された塩の貿易、塩政による強制ノルマと高い塩税、社会主義思想の波、産業の近代化など、諾鄧は激しい歴史的変容を経て現在まで持続してきたのであった。かつて物質性に満ちた諾鄧塩は、現在は精神的規範として、依然として諾鄧の人々のアイデン

ティティを支えている。

以上のように、さまざまな外力に受け答えられる凄まじい抗堪性と、変化に適応していく柔軟性によって諾鄧村を千年村にたらしめた。

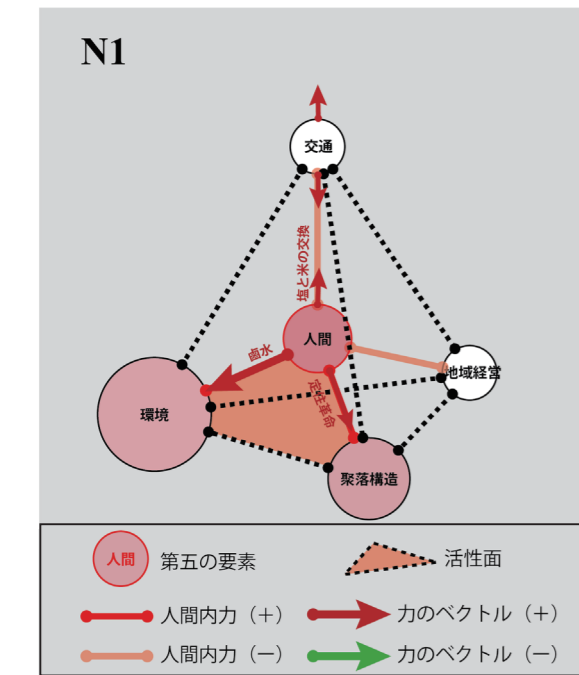
第五章 結論

本論文では、雲南省諾鄧村を事例にエキスティクス理論と千年村方法論をそれぞれ実践した結果、エキスティクス理論は人間の需要を変化させる政治影響や技術的社会的外力に、チェックリストは持続的変容プロセスにおける人間が行った工夫という内力に焦点を当てていることが分かった。

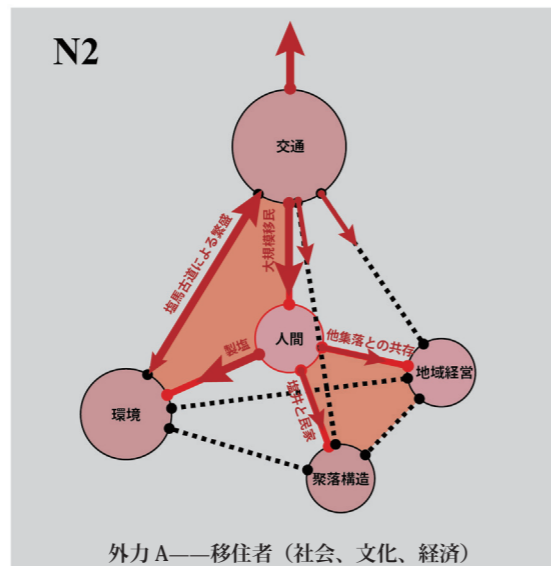
両極から出発する両理論のベクトルを分解し、再構成した「結晶構造の動的平衡モデル」は集落の歴史的変容を理解するためのより高次元地域評価手法として、特に聚落の抗堪性を評価できるポテンシャルがあることを結論づけた。

図版出典

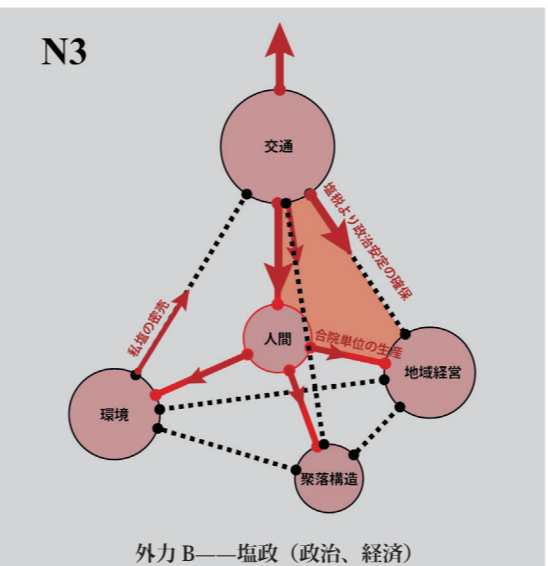
すべて筆者作成



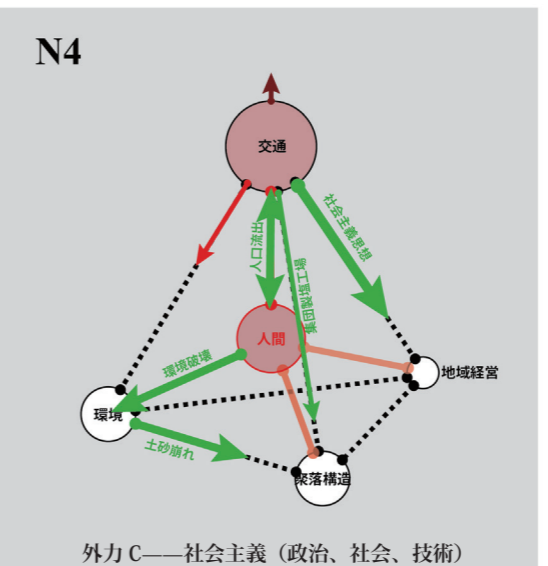
原始平衡 N1
鹵水という資源があるため人間が定住する。製塩の技術が徐々に形成される。必然的に塩井のまわりに棲み着く。最初は米を作っていた、あるいは米を作る選択肢があったかもしれない。それが製塩と相容れないことから、米の代わりにトウモロコシを作る。塩による最初の交換がはじまる。おそらく最初は周辺集落が作った米との交換。



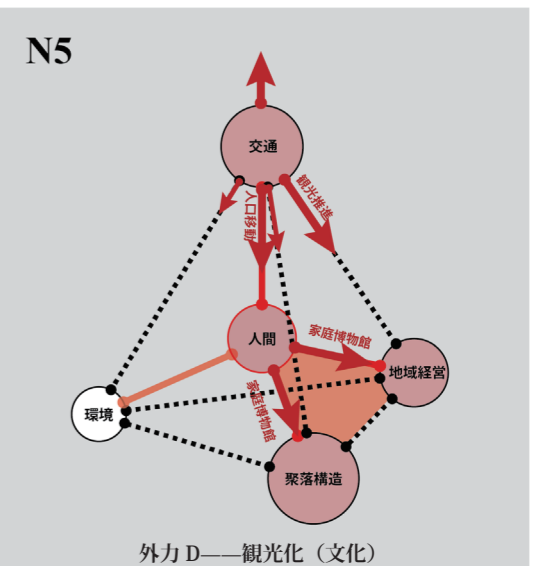
動平衡 N2
中国歴史上の人口大移動はみんな塩のためであった。ペー族に漢民族、イ族などほか多数。漢夷雑処。文化の融合。経済活動としての製塩の効率化をはかり、鹵水と淡水を仕分ける技術が発達していく。必然的に、塩の生産量が増え、貿易が始まる。貿易の道ができる。道ができたことによって更に売買が繁盛する。諾鄧は裕福な村となる。富の源である鹵水から鹵龍王への信仰が生まれる。そして周囲稲作の集落を配慮し、早魃が続いた際に雨乞いの儀礼を行う。諾鄧村の雨乞いは製塩によって持たされた経済的格差を観念的に緩和させ、周辺の村々との友好な近隣関係を結ぶ役割があった。



動平衡 N3
朝廷が目につけたのは、塩による莫大な税収のみならず、辺境地の政治を安定させるとの目論見もあったとされている。おそらくこの時期に、鹵水所有の有無による灶戸、龍工、荒戸などの階級が生まれる。それは製塩を管理するために、必然的に鹵水の所有を家族に割り付け、ノルマを課せる必要があったためである。合院による家族単位の生産構図が生まれる。一方、製塩という生産活動自体は変化していないものの、強制製塩の側面も大きい。そのため、「私塩」が誕生する。塩の売買できた道は、官塩と私塩で行き交う。



動平衡 N4
大規模集約的生産が始まり、燃料問題が大きな課題となった。燃料用木材を伐採して運ぶ商人もいた。しかし、社会主義による生産性の低下で収入が減少し燃料木材を買う余裕もなくなり、近くの森林を伐採するようになる。里山は禿山になる。大地を覆う植生の喪失によって地滑りが起きる。加えて、海塩の大規模生産も実現され、もはや鹵水による製塩は経済性が悪い。おまけに、近代交通の発明によって、馬と人力による交通は劣位となる。結果、1995年に塩井が封鎖され、塩と交通の二大支柱を失った諾鄧は貧しい村となる。塩民は農業に帰すか出稼ぎに行く。



動平衡 N5
塩業のない諾鄧には新たな価値が発見された。山地地形を踏み込んだ集落配置や山地独特な民家様式、千年続いた製塩による伝統文化。政府による観光化の推進で、国内外から観光客がやってくる。観光関連産業が生まれる。民宿経営目的の新たな移住者が発生し、1キロ四方の諾鄧には「客棧」に転用された民家が十軒ほどある。また、生産生活道具や資料などの伝統的展示を展示する家庭博物館が自発的に発生する。観光の経済的効果で収入が倍増した家もある。人々は塩の文化伝統の烙印が諾鄧の第二生命であることは理解する。中断された龍王会も復活する。